

更級村

村名の由来
塚田哲男

明治6年(一八七三)、長野県は各村に学校をつくって教育を普及する御触れを出した。当時の各村は、一つの村では其盤が小さく、運営が難しいので村々連合でつくることが多かった。当地の若宮村、須坂村、羽尾村は近縁といつて、三力村連合の学校を設立することになった。さて名前はどうするか。三力村はそれぞれ小さい村ながら、独自の気風があつて統合には「若宮」なこともあつたようだが、結局、校名は「更級村」といふことになった。

更級は古代中国の殷の時代の青銅器で、すくぶる神聖視されていた。鼎立とは、この器の脚が三本であつて、漢和辞典によれば「三者がたがいに対立する」とある。三者がたがいに立つ、平等の立場を示す意として決められたようだ。この名はその後、県の方針が国の意向が知らぬが、「所在地の名をもつて校名とするべし」との通達で、明治19年に改名することになる。学校所在地は羽尾村なので、名前は「羽尾学校」となった。若宮村と須坂村ではどう思ったか。学校経営は自分の負担をしようとする。名前は「羽尾」では、それなら負担金も羽尾で持ちたいじゃないか。かといふ不満の声もあつた。この校名は明治25年まで続いていた。後年、更級小学校の校地を決めるときに、寄付金非協力などの動きがあつたのは、このときの感情の鬱屈が一つの原因をなしていたと感じ取れるのである。校名一つ決めるのも、まことに難しいものだった。

町村合併は国の方針が明治21年に公布され、若宮、須坂、羽尾の三力村は同22年に合併することになった。当時三力村の連合戸長は、羽尾村の塚田小右衛門(雅文)が務めていた。

合併するとすれば、新しい村名を考えねばならない。当時の一般的な方法としては、合併する中の一番大きな村の名をとって名づけるのが大方の方法であつた。所によつては、両村、あるいは三力村の一字ずつをとつて名づけたというのもあるが、これこそ苦肉の策で、双方または三方ともに歴史的背景を消し合つた形になつてしまつて、羽尾、須坂、若宮三力村の合併後の名前はいかにすべきか。ここで主導したのは塚田雅文である。「小右衛門」は代々の襲名。羽尾村は該三力村の中では第一の大村

塚田小右衛門さんの執念

で、世間一般の風潮からすれば「羽尾村」と新村名を名乗つたとしても不思議ではなかつた。事実、雅文が公私にわたつて書き残した文書「雅文日記」には「新村名は羽尾仙石にては、昔情もこれ有り候とも、わが意見を以つて更級村と改称する」と記されている。雅文は前々から「伝説に名高い真の姨捨山は冠着山である」との説を抱き、三力村はその地域内にあり、往古の和名抄に載る「更級の郷」は当地を指すとの確信を持っていた。このため雅文は新村名を更級村とすべく提案をしたのである。

関係する三力村のうち、第一村の戸長がこのような所論を示せば、ほかの二力村も聞き入れざるをえない。雅文は、学校名のこととが心裡にあつたのであろう。一村統一のために新しい名前、それも皆が納得できる美しい名前が必要なり、と考究したのではなかつたか。これから「更級」の名を名乗るに、雅文の平素の勉学の成果が開示されることになる。

他地名も乗り出

雅文は古来の文献をあさつた。当時の文献は限られていたが、手に入れられる限りの史料は渉猟し尽くしたようである。雅文の使つた文書類は村に寄付されているが、その中に「信濃地名考」(吉沢好謙著)がある。随所に赤い線が引かれ、苦心して探索されたようすがまざまざと遺されている。この勉学に基づき「命名の由来」という上申書を書き上げ、三力村の代表者多数の署名をつけて県庁に提出した。

羽尾村地籍にある冠着山は、更級郡著名の高山で、姨捨山の別名がある更級山もこの山のことです。歴史をさかのぼると、わが三力村はこの山のふもとにあり、古更級郷(更級郡九郷の一つ、和名抄にある)と云つております。これは更級山より発すること明らかです。冠着山の嶺は若宮村万治嶺に連なり、その麓に若宮八幡社があります。これを佐良志奈神社と号します。延喜式内社です。更級山の東麓にあるために佐良志奈の社号を付したのです。

ところが、郡内のどこかに、更級の名にこだわる所があつて「わが地こそ更級」といふ叫びがあつた、とも伝えられている。そのため、雅文はさらに精査を命ぜられて再申請を提出している。

羽尾村冠着山に連なる一本松峠は、古昔の官道、浦野より越後に通ずる道で、延喜式にも駅名があり、ならびに令義解に記されている馬の数を「参考になれ」と記されている。当地が更級の地であることは明らかと存じます。若宮村八王子社境内にもある石祠にも、「更級の里若宮村」と刻されています。惜しいことに、数百年を経、年号が摩滅してよく分かりませんが、実際に「更級」になれば、古事であることお分かりになるでしょう。佐良志奈神社の社号は、千有年前の延喜式に記載されております。いつのころからかは、はっきりしませんが、吉田殿(京都吉田家、神社の元締)に願ひ出されたいた告文中に、「貞観の古昔、佐良志奈神社と称してまつる云々」とありました。また社名はだいたい、地域名に拠るもので、隣郡の埴科坂城郷の坂城神社、小泉郡山家郷の山家神社など、ほかにも類似数が多くあり、これによつても更級郷は三力村の地名に相違ありません。

たし、めでたし」となった。この間の雅文の心労いかにばかりであつたろうか。嘉永元年(一八四八)生まれの、おん39歳の時の大奮闘である。なお、この折り、書面には現れぬ証拠材料として佐良志奈神社社標の側面に刻された和歌

月のみか露しもしくれば雪まで
さらさらさらさらさらさらさら

正親町三条実繁卿の姑、柳原夫人が大きな効果をもたらしたと、豊城直祥宮司が語られたことがあるが、この神社の明治の当主、豊雄氏が、雅文の後ろ盾として協力、助言をされたものである。

善光寺と並ぶ名所

更級村と命名されてから現代まで、百数十年がたつた。この間に新しく分かつたところからかは、はっきりしませんが、吉田殿(京都吉田家、神社の元締)に願ひ出されたいた告文中に、「貞観の古昔、佐良志奈神社と称してまつる云々」とありました。また社名はだいたい、地域名に拠るもので、隣郡の埴科坂城郷の坂城神社、小泉郡山家郷の山家神社など、ほかにも類似数が多くあり、これによつても更級郷は三力村の地名に相違ありません。

幸いに新村名は申請通り可決されて「め

苦情これ有り候ともわが意見



略、更級の里姑葉山に對す、里の南西にあり。あさまのたけ燃ゆ、ちくま川大河なり、國中を廻流す

すなわち、八百年前、「使者は更級の里を實見し、その位置まで書を残している。「使者の見た位置は千曲川の対岸である。「明月記」は永く冷泉家の蔵本で、広く世間に知られることもなかつたのである。明治期の人には、目に触れ得ぬところにあつたようだ。しかも、この一文、信濃の印象的な所として浅間山、千曲川、そして善光寺と地名を挙げ、それと並べて更級の里(姑葉山)を記していることは、都人にとつて更級の里は、それほど期待される名所であつたことを示している。

後醍醐天皇の皇子である宗良親王が更級の里に住まれた時期は、明確ではないが、一三四七(正平二年)から数年と言われている。自分で編んだ「新業和歌集」に次の歌などがある。

秋 姨捨山近く住みはべりしころ、夜更くるまで見て思いつけ侍りし
これにます都のつとはなきものを
いざといはば姨捨の月

また、親王の歌集である「季花集」には、佐良科の里に住みはべりしかば、月とおもしろく秋のこに思ひいだされければ、もろとも姨捨山をさえぬとは、都にかたれさらしな月

清涼殿のふすま絵にも

清涼殿は京都御所の中で、紫宸殿が正殿として天皇の公式行事が行われたのに対して、天皇の御座所として用いられた御殿で、天皇の居住の場と、公式行事の行われるための場と、大小さまざま多数の部屋に区切られている。そのうち「萩戸」は天皇の居室として用いられていた。

この部屋の四面に立てられたのが鳥居障子と呼ばれるふすまで、「更級の里」を含む名所絵が各面に描かれている。更級の里図は名所姨捨山とふすまの里の景色を映したもので、初冬の時、雨にけふる山(冠着山)と、竹林に民家を配している。ふすま上部には次の和歌が書かれている。

おぼすてのやまでしるる風みえて
そのさらしな里のたかむら

絵の筆者は土佐光清(一八〇五-一八六二)、土佐派大和絵の最後の巨匠と言われる。和歌は飛鳥井雅典。御所内には、ほかにもふすま絵や布障子絵に、大和名所絵と言われる各地の著名な歌枕となる名所が描かれている。その数は更級の里を含めて、葛城山、天の橋立、勢田の橋、和歌の浦宮城野、松島などの天下の名勝の中に、更級の里が入っているのである。なお、この絵いわゆる絵巻事ではない。冠着の実態を

らえた実写である。この絵も更級の里は冠着のふすまにあることを写している。

戦後の遺跡調査は、数多くの新事実をもたらした。当地においても、幅田遺跡(羽尾須坂地区)の発掘に続き、昭和62-63年に行われた園場整備事業に伴う円光房遺跡の発掘では、縄文時代中期の遺構を中心に、多くの時代の遺跡が発見された。その中に、平安初期の掘立て柱建物8棟発見されている。明らかに民衆のものではなく、官衙役所とみられる遺構で、この地が当時の国道である東山道の支道の筋であつたことと考え合わせ、この地の重要度が高まると強く印象づけられるようになった。遺跡は、これら三島平、代の地域に続いており、更級の里」の実在を示していると言えらる。

北村甚兵衛さんのあいさつ
昭和49年(一九七四)、更級小学校の開校百年を祝う式典が行われた。講堂で披露された「開校百年の呼びかけ」は、全校の児童が学年ごとに声をそろえて百周年を祝う言葉を呼びかけるもので、参列した父母の感激はひとかたならぬものであつた。

式典のあとの祝宴において、卒業生を代表して北村甚兵衛氏が祝辞を述べられた。北村氏は明治29年のお生まれで、更級村長に33歳のときに就任。その後、村長と一緒に県会議員を数期、務められた長老で、このときの歳のご高齢であつた。

氏はその老いを感ぜさせぬよく聞かせる声で論旨明快に、学校の百年を祝う言葉を述べられた。「更級村」という村名は、昭和30年の戸倉町、五加村との合併でなくなつてしまつたが、氏は、「更級の名は、先輩のみならずが大変苦心して選んだ由緒ある立派な名前である。将来、この小学校の所属する町が、どう変わるうとも、ぜひ更級小学校の名前だけは忘れずに残して欲しい」と語り、明治時代、先輩たちが深く考えてこの村の名をつけたことを説明され、参列者に深い感動を与えた。

明治の時代、当時の先人たちは、少ない史料に四苦八苦しながら、その名の正当を証し、美しい村名を後世に遺された。雅文さんが新たに判明した事実や史料を、今見ることができるとは、それこそ快哉の声を挙げられ、「己が眼に狂いはなかつた」と欣喜されることであらう。偉大な先達たちに、ただただ敬服するばかりである。

この論文の筆者、塚田哲男さんは旧更級村(現千曲市更級地区)生まれの郷土史家で二〇〇七年、お亡くなりになりました。「更級への旅」でも、塚田さんの「教示をもとに「さらしな」にまつわるエピソードを紹介しています。(67、13、14、26、30、33、34、36、37、39、40、41、44、51、52、53、57などの各号)さらしな堂(代表・大谷善邦) 千三九・〇八三 長野県千曲市大字若宮一八四・六 (旧更級郡更級村)